

受験番号

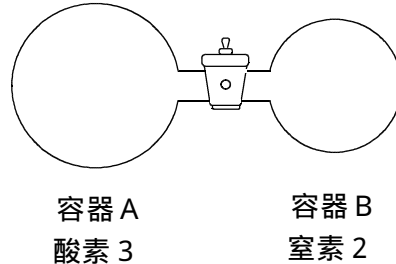
潜水 A

1 / 4

(潜水業務)

問 1 3 の容器 A と 2 の容器 B が活栓を閉じた状態で配管により連結しており、容器 A には 250 kPa の酸素が、容器 B には 200 kPa の窒素が入れているとき、活栓を開いて酸素と窒素を混合させたときの混合気体の圧力 (kPa) は次のうちどれか。

ただし、配管部の容積は無視するものとする。



- (1) 130
- (2) 200
- (3) 230
- (4) 250
- (5) 450

問 2 気体の性質に関し、次のうち正しいものはどれか。

- (1) ボンベ内の高圧空気が潜水作業者に供給される場合のように急速に膨張すると温度が上がり、高圧空气中に水分が含まれている場合には、その一部は水蒸気になる。
- (2) 非常に高い圧力下で気体を混合すると拡散しにくいので、圧力の高い混合気体をつくる時は、低い圧力下で混合した気体を圧縮する。
- (3) 二酸化炭素は、無色、無臭の気体で空気中に約 0.1% の割合で含まれている。
- (4) 酸素は無色、無味、無臭の気体であり、可燃性ガスに分類される。
- (5) 一酸化炭素は、物質の不完全燃焼などによって生じ、無色の気体であるが、異臭をもつため発見は容易である。

問 3 水中における光や音に関し、次のうち正しいものはどれか。

- (1) 音は、水中では空気中より速く伝わり、また長い距離を伝達し、両耳効果は増加する。
- (2) 光は、空気と水の境界で一定の入射角以内では屈折し、その屈折率は入射角と屈折角の正弦 (sin) の比で表す。
- (3) 透明度の低い水中でよく見える色は、蛍光性の白、黄、オレンジの順である。
- (4) 水中に入った太陽光線は、次第に吸収され、透明度の高い水中でも照度は水深 15 m で約 1/4 に減少する。
- (5) 水中での太陽光線は青色が最も吸収されやすく、赤色が最も吸収されにくいので、水中での物は青のフィルターを通したときのように見える。

問 4 ヘリウムと酸素の混合ガス潜水に用いるヘリウムの特性に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) ヘリウムは、窒素と同じく不活性の気体であり、窒素のような麻酔作用はないが、窒素に比べて呼吸抵抗は大きい。
- (2) ヘリウムは、酸素及び窒素と比べて、熱伝導率が大きい。
- (3) ヘリウムは、無色、無臭で燃焼や爆発の危険性がない。
- (4) ヘリウムは、体内に溶け込む速度が大きく、溶け込む量が少ないので、はやく飽和する。
- (5) ヘリウムは、気体密度が小さく、いわゆる Donald Duck・ボイスと呼ばれる現象を生じる。

問 5 潜水業務の危険性等に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 海中の生物による危険性としては、みずたこやうつぼ等によりかまれるもの、がんがぜやごんずい等により刺されるものなどがある。
- (2) 水中におけるガス溶接・溶断作業では、作業時に発生したガスが滞留し、ガス爆発を起こすことがあるが、水中であるため軽い火傷を受ける程度ですむ。
- (3) 潮流の速い水域でスクーバ式潜水により潜水作業を行うときは、命綱を使用する。
- (4) 潜水作業船を係留するときは、アンカーを 2 箇所以上設ける。
- (5) 水中作業による事故には、潜水ホースが潜水作業船のスクリューへ接触したり、巻き込まれることなどがある。

- 問 6 ヘルメット式潜水における潜水墜落に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 潜水墜落により、スクイズを起こすことがある。
 - (2) 潜水墜落により、送気不足となって窒息事故を起こすことがある。
 - (3) 潜水墜落により、水圧が急激に増し、浮力が更に減少する。
 - (4) 潜水墜落は、潜水作業への過剰な送気に起因する。
 - (5) 吹き上げ時の対応を誤ると潜水墜落することがある。

- 問 7 ヘルメット式潜水器による吹き上げ事故の予防措置として、誤っているものは次のうちどれか。
- (1) 何らかの理由で浮上し始めたときは、頭部を胴体より下になるような姿勢をとる。
 - (2) 潜水作業中に潜水深度を変えるときは、必ず船上の連絡員に連絡する。
 - (3) 潜水作業には潜水深度に適合した空気量を送気する。
 - (4) 鉛錘（ウエイト）は、浮力の変化を十分考慮して選ぶ。
 - (5) 腰部をベルトで締め付け、空気が潜水器の下半身に入り込まないようにする。

- 問 8 水中拘束の原因、予防等に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 送気ホースを使用しないスクーバ式潜水では、ロープなどに絡まる水中拘束のおそれはない。
 - (2) ダムの放水口付近では、足が放水口に吸い込まれ、動けなくなって水中拘束になることがある。
 - (3) ブロックなどの重量物の下敷きになって水中拘束になることがある。
 - (4) 障害物を通過するときは、その経路を覚えておき、帰りも同じ経路を通るようにする。
 - (5) 水中拘束予防のため、潜水を予定する水域の状況を事前に調べて、潜水作業の手順を検討する。

- 問 9 ^{おぼ}溺れの原因に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 潜水作業中のトラブルによるパニックが原因で溺れることがある。
 - (2) 送気式潜水では、送気ホース取付部や継手部の破損が原因で溺れることがある。
 - (3) スクーバ式潜水では、窒素酔いにより正常な判断ができなくなり、マウスピースを外して溺れることがある。
 - (4) 気道や肺に水が入ってしまったため、反射的に呼吸が止まって溺れることがある。
 - (5) 過剰な送気を行ったため溺れることがある。

- 問 10 特殊な環境下における潜水に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 無視界環境下では、作業前に障害物等の調査を行うとともに、潜水作業にはナイフ、ペンチ、ヤスリなどを装備させる。
 - (2) 標高が高いところにあるダム等での潜水では、通常の潜水と同じ減圧を行うと減圧症を発症するおそれがある。
 - (3) 強潮流下での潜水作業では、潜降索を張り、潜水者は潜降索につかまりながら潜水をする必要がある。
 - (4) 潜水可能な潮流の条件は、スクーバ式潜水では 0.5 ノット以下、ヘルメット式潜水では 1.5 ノット以下といわれている。
 - (5) 無視界環境下でスクーバ式潜水を行う場合には、潜水作業に必ずライフラインを装備させる。

(送気、潜降及び浮上)

問 1 1 潜水業務に用いるコンプレッサーに関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) コンプレッサーには、固定式と移動式があるが、固定式は潜水作業船に設置される場合が多い。
- (2) コンプレッサーは、原動機で駆動され、ピストンを往復させシリンダー内の空気を圧縮する構造となっている。
- (3) コンプレッサーの冷却方式には、水冷式と空冷式があり、移動式のコンプレッサーでは水冷式が多く採用されている。
- (4) 最近の潜水作業船は、大出力化した主機を備えるようになっているので、コンプレッサー専用の原動機(補機)を設置して駆動するものが多い。
- (5) 移動式コンプレッサーは、コンプレッサー、空気槽、原動機を組み合わせて一体型にし、重量も 100 kg 程度と小型、軽量にまとめられている。

問 1 2 送気ホース及び送気用配管に関し、誤っているものはどれか。

- (1) フーカー式潜水では、通常、呼び径が 13 mm の送気ホースが、また、ヘルメット式潜水では呼び径が 8 mm のものが使われている。
- (2) 送気ホースには、比重により沈用、半浮用、浮用の 3 種類のホースがあり、作業内容によって使い分けられる。
- (3) コンプレッサーと空気槽の接続には金属管の銅パイプまたはフレキシブルパイプが使用されている。
- (4) 送気ホースは、始業前にホースの最先端を閉じ、最大使用圧力以上の圧力をかけて、耐圧性と空気漏れの有無を点検、確認する。
- (5) 送気ホースは、始業前に継手部分のゆるみや空気漏れが発生していないか点検、確認する。

問 1 3 送気式潜水における潜降に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 潜水作業者は、頭部が水中に没した段階で潜水機器に異常のないことを確認し、潜降索を用いて毎分 10 m 以下の速度で潜降する。
- (2) 潜水作業者は、潜降中に耳の痛みを感じたときは、潜降索につかまって停止し、下顎を左右に動かす、鼻をつまむ等により耳抜きを行う。
- (3) 体調不良などで潜降する時に耳抜きがうまくできない場合でも、耳栓は絶対に使用してはならない。
- (4) 潜水作業者と連絡員の間で信号索により連絡を行うとき、発信者からの信号を受けた受信者は、必ず発信者に対して同じ信号を送り返す。
- (5) 潜水作業者と連絡員の間で、モールス信号による返信と発信が違ふ場合には、必ず潜水者の信号を優先する。

問 1 4 スクーバ式潜水における浮上の方法に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) BC を装着したスクーバ式潜水で浮上を開始するときは、BC のインフレーターを左手で肩より上に上げて、排気ボタンを押す。
- (2) 段階浮上法では、一定の水深ごとに刻まれた各段階で、減圧症予防のための所定時間浮上停止を行い、各段階の間は毎分 10 m 以下の速度で浮上する。
- (3) 浮上速度の目安として、自分が排気した気泡を見ながら、その気泡を追い越さないような速度で浮上する。
- (4) 無停止減圧の範囲内の潜水の場合であっても、水深 6 m もしくは 3 m の位置で安全のため浮上停止(セーフティ・ストップ)を行うようにする。
- (5) 視界のきかない水中においては、障害物を避けるため腕を頭の上に伸ばして浮上する。

問 1 5 ヘルメット式潜水器に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 排気弁は、潜水服内の余剰空気を排出したり、潜水作業者の呼気を排出するのに用いる。
- (2) 逆止弁の作動点検では、ヘルメットの送気ホース取付口を口で吸ってみて、軽く通ることを確認する。
- (3) ベルトは、腰バルブの固定用としても使われ、送気ホースに対する外力が直接ヘルメットに加わることを防ぐ。
- (4) ヘルメットの側面窓には、金属製格子等が取り付けられて窓ガラスを保護する。
- (5) 送気ホースからヘルメットに入る空気量の調節は、潜水作業者自身が腰バルブで行う。

問16 スクーバ式潜水に用いられるポンペ、圧力調整器（レギュレーター）に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) ポンペに圧力調整器を取り付けたときは、ポンペのバルブを開け、空気を第1段減圧部、中圧ホース、第2段減圧部の順に流し、空気漏れなどの異常がないことを確認する。
- (2) 圧力調整器は、ヨーク、ヨークスクリュー、第1段減圧部、中圧ホース、及び第2段減圧部から構成されている。
- (3) リザーブバルブ機構は、一定の潜水時間が経過したとき、自動的に作動して空気の供給を止め、一定量の空気をポンペに確保するものである。
- (4) ポンペの空気は、圧力調整器の第1段減圧部と第2段減圧部で2段階に減圧され、潜水者に供給される。
- (5) ポンペに水が浸入することを防ぐため、使用後も0.5～1MPaの空気を残しておく。

問17 潜水業務に必要な器具に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 救命胴衣は、引金を引くと圧力調整器（レギュレーター）の第1段減圧部から高圧空気が出て、膨張するようになっている。
- (2) 信号索は、潜水者と船上との連絡のほか、「いのち綱」の役目も果たすもので、水中電話があっても、万一の事故発生に備えて用意しておくことが望ましい。
- (3) スクーバ式潜水で使用する足ヒレ（フィン）には、ブーツを履いたままはめ込むフルフィットタイプと、爪先だけを差し込み踵をストラップで固定するオープンヒルタイプとがある。
- (4) ヘルメット式潜水の場合、潜水靴は、潜水作業中の体の安定と下半身のバランスの確保のため重量のあるものを使用する。
- (5) スクーバ式潜水で使用するマスクは、顔との密着性が重要で、ストラップをかけないで顔に押しつけてみて呼吸を行い、漏れのないものを使用する。

問18 高気圧作業安全衛生規則別表第2（潜水業務用時間表）の潜水時間、ガス圧減少時間等に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 1回の潜水時間が長くなると、業務間ガス圧減少時間が長くなり、減圧時間も長くなる。
- (2) 1回の潜水時間を短くして潜水回数を増やすことは、1日あたりの合計の業務間ガス圧減少時間が増加し、潜水作業以外の時間が多くなる。
- (3) 潜水時間とは、潜水作業者が潜降を開始した時から浮上を開始するまでの時間をいう。
- (4) 業務間ガス圧減少時間は、前回の潜水作業によって体内に蓄積された窒素ガスをある程度排出するため、地上又は船上で安静にしていなければならない時間である。
- (5) 浮上後、身体を安静にして業務終了後ガス圧減少時間が経過したときには、体内ガス圧係数は1になる。

問19 1日2回の潜水業務を1回目18m、2回目25mの深度で行うこととし、1回目の潜水時間を55分とした場合、2回目の潜水時間の限度に最も近いものは次のうちどれか。

（本問及び次問の業務間ガス圧減少時間等については、別表A及びBを用いて算出すること。）

- (1) 90分
- (2) 98分
- (3) 110分
- (4) 120分
- (5) 131分

問20 前問に関して、2回目の作業の潜水時間を75分としたとき、浮上停止の位置と浮上を停止しなければならない最小時間は次のうちどれか。

- (1) 水深6mで21分、水深3mで22分
- (2) 水深6mで18分、水深3mで16分
- (3) 水深6mで26分、水深3mで22分
- (4) 水深6mで27分、水深3mで25分
- (5) 水深6mで29分、水深3mで41分

(高気圧障害)

問 1 人体の呼吸器系に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 酸素と二酸化炭素のガス交換は、肺胞内空気と血液との間及び毛細血管中の血液と組織細胞との間の2つの段階で行われる。
- (2) 呼吸中枢が刺激され、呼吸運動が行われるためには、血液中に一定量以上の二酸化炭素が含まれていることが必要である。
- (3) 呼吸死腔が小さいほど、酸素不足や二酸化炭素蓄積が起こりやすい。
- (4) 成人の安静時における1分間の呼吸量は、6～7程度であるが、重労働時には50にも増加することがある。
- (5) 気道は、吸入した空気を暖めたり、空気中の細菌、異物などを気道粘膜に吸着させる働きがある。

問 2 血液の循環に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 心臓は、血液を全身に供給するためのポンプの役割を果たしており、毎分4～5の血液を送り出す。
- (2) 動脈血は、酸素や栄養素を全身に供給し、静脈血は、二酸化炭素や老廃物を処理器官へ輸送する。
- (3) 最大血圧は、心室が拡張したときの血管内圧力で、最小血圧は、心室が収縮したときの圧力である。
- (4) 血圧は、加齢とともに増加するが、成人では通常、最大血圧が110～130mmHg、最小血圧が70～90mmHgくらいである。
- (5) 大動脈の根元から出た冠状動脈は、心臓の表面を取り巻き、心筋に酸素と栄養素を供給する。

問 3 人体の神経系に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 末梢神経は、体性神経と自律神経からなっている。
- (2) 脳神経は、脳から出る末梢神経であり、12対あって、頭部・頸部・体幹の内臓などに分布する。
- (3) 自律神経は、交感神経と副交感神経とに分類される。
- (4) 交感神経は主として夜になると働きが活発になり、副交感神経は昼になると働きが活発になる。
- (5) 人体の機能は、交感神経と副交感神経の二重支配による調節と平衡の上に成り立っている。

問 4 人体に及ぼす水温の作用等に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 体温は、代謝によって生ずる産熱と、人体と外部環境の温度差に基づく物理的な過程による放散(放熱)のバランスによって保たれる。
- (2) 水中では、一般に水温が20以下では、保温のためのウェットスーツやドライスーツの着用が必要となる。
- (3) 水の比熱は空気に比べてはるかに大きいですが、熱伝導率は空気より小さい。
- (4) 水中では、汗の蒸発による放熱作用はない。
- (5) 水中で体温が低下すると、震え、意識の混濁や喪失などを起こし、死に至ることもある。

問 5 潜水によって生じるスクイズに関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) ヘルメット式潜水では、スクイズは、浮力の不足で潜水墜落したときや送気が止まり逆止弁がきかないときに起こる。
- (2) スクイズは、面マスクを装着した素潜りやスクーバ式潜水でも起こることがある。
- (3) フーカー式潜水では、スクイズは、潜降する際、鼻から面マスクに空気を送ると起こりにくい。
- (4) スクイズを起こしたときの処置としては、まず患部を暖め、重症の場合には医師の手当を受ける。
- (5) 潜水によって、歯髓腔や歯の周囲組織にスクイズを生じることがあるので、う歯その他歯牙疾患の検査や治療を受けることが必要である。

- 問 6 潜水による副鼻腔や耳の障害に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 副鼻腔は頭蓋骨の内部にある空洞で、前頭洞、上顎洞、篩骨洞、蝶形骨洞と呼ばれている洞である。
 - (2) 耳管は中耳の鼓室から咽頭に通じる管で、通常は開いているが、唾を飲み込むような場合に閉じて鼓膜内外の圧調整を行う。
 - (3) 副鼻腔に障害を起こした場合には、その部位に鋭い痛みを生じたり、鼻血が出ることもある。
 - (4) 潜降を始めて水深3mくらいになると、ほとんどの人は鼓膜に痛みを感じるようになる。
 - (5) 副鼻腔と耳の障害の予防法の一つに初期の潜降をゆっくり行うことがある。
- 問 7 潜水業務における酸素中毒に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 酸素中毒の発生には吸気の酸素分圧と吸入時間が大きく関係するが、大気圧中においても、長時間純酸素を吸入すると、中毒を起こすことがある。
 - (2) 酸素中毒には、脳に障害を生じる中枢神経型と胸部の痛みや肺、気管支などに炎症を起こす肺型がある。
 - (3) 高い圧力下で純酸素吸入を続けると、肺型の酸素中毒によって短時間のうちに痙攣を起こすことがある。
 - (4) 酸素中毒は、送気中に二酸化炭素が多いときなど環境条件が悪いときに起こりやすい。
 - (5) 中枢神経型の酸素中毒を起こしたときは、肺の破裂などを起こさないように注意して直ちに浮上する。
- 問 8 窒素酔いに関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 窒素酔いにかかると、健全な精神活動が次第に鈍くなり、酒に酔ったような状態で、気分が爽快となり、意味もなく笑ったりする。
 - (2) 窒素酔いは、吸気中の窒素分圧が高くなって、麻酔作用が出現することによって起こる。
 - (3) 初めはほろ酔い程度の窒素酔いでも、深く潜るにつれて酔いの症状がひどくなる。
 - (4) 窒素酔いがひどくなると、筋道を立てて考えることができなくなり、ついには意識を失い、溺れの原因になることがある。
 - (5) 窒素酔いは訓練などで抵抗力をつけることはできないので、窒素酔いにかかりやすい人は深い潜水は行わないようにする。
- 問 9 減圧症の症状に関し、次のうち正しいものはどれか。
- (1) 減圧症を症状別にみると呼吸循環器型減圧症(チョークス)の障害が過半数を占める。
 - (2) 皮膚型減圧症は、しばらくたつと消え、より重い症状に進むことはない。
 - (3) 運動器型減圧症(ベンズ)は、潜水作業の内容によっても異なるが、人体で二酸化炭素を多く発生するひじ、肩などの部分に多く発症する。
 - (4) ベンズは、繰り返しかかっても障害を残すことはほとんどない。
 - (5) 中枢神経型などの重症の減圧症は、浮上後早期に発症することはない。
- 問 10 心肺蘇生法に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 舌根が完全に気道を閉塞したときは、胸が動いていても呼吸音は聞こえない。
 - (2) 水分や吐いた物、分泌物が口や咽喉の中に詰まり、気道を閉塞することがある。
 - (3) 口対口呼吸吹き込み法では、5秒くらいかけて胸が十分膨らむ程度に息を吹き込む。
 - (4) 口対口人工呼吸を行うときは、フェイスシールドなどの感染防護具を使用することが望ましい。
 - (5) 呼びかけに反応がなく、普段どおりの正常な呼吸が行われていない場合には、直ちに心肺蘇生を行う。

(関係法令)

問11 空気圧縮機によって送気を行い、潜水作業者に圧力調整器を使用させて、最高深度が20mの潜水業務を行わせる場合、法令上、予備空気槽の内容積は少なくとも何としなければならないか。

ただし、予備空気槽内の空気の圧力は0.7MPa(ゲージ圧力)とし、次のイ又はロのうち適切な式を用いて算定すること。

$$\text{イ } V = \frac{4.0(0.03D + 0.4)}{P}$$

$$\text{ロ } V = \frac{6.0(0.03D + 0.4)}{P}$$

- (1) 58
- (2) 65
- (3) 75
- (4) 86
- (5) 112

問12 次の業務に従事する労働者に対して事業者が、法令上、特別の教育を行わなければならないものはどれか。

- (1) 潜水作業へ送気するための空気圧縮機を運転する業務
- (2) 潜水作業への送気の調節を行うためのバルブ又はコックを操作する業務
- (3) 連絡員の業務
- (4) 潜水作業の監視を行う業務
- (5) 潜水器を点検する業務

問13 携行させたボンベ(非常用のものを除く。)からの給気を受けて行う潜水業務に関し、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) 潜降直前に、潜水作業者に対し、当該潜水業務に使用するボンベの現に有する給気能力を知らせなければならない。
- (2) 圧力0.5MPa以上の気体を充填したボンベから給気を受けさせるときは、潜水作業者に二段以上の減圧方式による圧力調整器を使用させなければならない。
- (3) 潜水作業者に異常がないかどうかを監視するための者を置かなければならない。
- (4) 潜水深度が10m未満の潜水業務でも、さがり綱を使用させなければならない。
- (5) さがり綱には、浮上停止の深度を示す位置に木札又は布等を取り付けておかなければならない。

問14 空気圧縮機による送気式の潜水業務を行うとき、法令上、潜水前の点検が義務付けられていないものは次のうちどれか。

- (1) さがり綱
- (2) 水中時計
- (3) 信号索
- (4) 送気管
- (5) 潜水器

問15 送気式潜水業務における連絡員及びその業務に関し、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) 連絡員を潜水作業者2人以下ごとに1人配置する。
- (2) 潜水作業への送気の調節を行うためのバルブを操作する業務に従事する者と連絡して、潜水作業に必要な量の空気を送気させる。
- (3) 潜水作業者と連絡して、その者の潜降及び浮上を適正に行わせる。
- (4) 送気設備の故障その他の事故により潜水作業者に危険又は健康障害の生ずるおそれがあるときは、速やかに潜水作業者に連絡する。
- (5) ヘルメット式潜水器を用いて行う潜水業務においては、一旦潜降させて、潜水作業者のヘルメットがかぶと台に結合されているかを確認する。

問16 潜水業務とこれに対応して潜水作業者に携行、着用させなければならない物との組合せとして、法令上、正しいものは次のうちどれか。

- (1) 手押ポンプから送気 …… 信号索、水中時計、
を受けて行う潜水業務 コンパス、鋭利な刃物
- (2) 空気圧縮機から送気 …… 信号索、水中時計、
を受けて行う潜水業務 コンパス、鋭利な刃物
(通話装置がない場合)
- (3) 空気圧縮機から送気 …… 水中時計、水深計、
を受けて行う潜水業務 浮上早見表
(通話装置がある場合)
- (4) ボンベ(潜水作業者に …… 救命胴衣又は浮力調整具、
携行させたボンベを除 信号索、水中時計、
く。)から給気を受けて 水深計
行う潜水業務
- (5) スクーバ式潜水器に …… 救命胴衣又は浮力調整具、
よる潜水業務 水中時計、水深計、
鋭利な刃物

問17 潜水業務に常時従事する労働者に対して行う高気圧業務健康診断に関し、法令上、正しいものは次のうちどれか。

- (1) 健康診断は、雇入れの際及び1年以内ごとに1回、定期に行わなければならない。
- (2) 健康診断は、水深10m以上の場所における潜水業務に常時従事する労働者に対して実施しなければならない。
- (3) 健康診断を行った結果、医師が必要と認めた者については、作業条件調査や心電図検査等を追加して行わなければならない。
- (4) 雇入れの際に実施した健康診断の結果については、所轄労働基準監督署長に報告しなければならない。
- (5) 健康診断の結果に基づいて、高気圧業務健康診断個人票を作成し、これを3年間保存しなければならない。

問18 再圧室に関し、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) 水深10m以上の場所における潜水業務を行うときは、再圧室を設置し、又は利用できるような措置を講じなければならない。
- (2) 再圧室の設置場所には、必要のある者以外の者が立ち入ることを禁止し、その旨を見やすい箇所に表示しておかなければならない。
- (3) 再圧室を使用するときは、出入に必要な場合を除き、主室と副室との間の扉を閉じ、かつ、副室の内部の圧力を主室より低く保たなければならない。
- (4) 再圧室を使用したときは、そのつど、加圧及び減圧の状況を記録しておかなければならない。
- (5) 再圧室については、設置時及びその後1月をこえない期間ごとに、電路の漏電の有無等一定の事項について点検しなければならない。

問19 潜水土免許に関し、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) 満18歳に満たない者は、潜水土免許を受けることができない。
- (2) 免許を受けた者が重大な過失により、潜水業務について重大な事故を発生させたときは、都道府県労働局長はその免許を取り消し、又は期間を定めてその免許の効力を停止することができる。
- (3) 免許証の交付を受けた者で、現に潜水業務に就いているものが住所を変更したときは、免許証書替申請書を免許証の交付を受けた都道府県労働局長又はその者の住所を管轄する都道府県労働局長に提出し、免許証の書替えを受けなければならない。
- (4) 免許を受けた者が免許証を他人に貸与したときは、都道府県労働局長はその免許を取り消し、又は期間を定めてその免許の効力を停止することができる。
- (5) 免許の取消しの処分を受けた者は、遅滞なく、免許の取消しをした都道府県労働局長に、免許証を返還しなければならない。

問20 次の設備器具のうち、厚生労働大臣が定める構造規格を具備しなければ、譲渡し、貸与し、又は設置してはならないものはどれか。

- (1) 潜水業務用空気圧縮機
- (2) 潜水業務用送気管
- (3) 潜水業務用ポンベの圧力調整器
- (4) 潜水器
- (5) 水深計